Revival from the Java Earthquake and historical city inheritance
–Yogyakarta, Indonesia

ジャワ地震からの復興と歴史都市遺産～インドネシア・ジョグジャカルタ

- **代表者：門内輝行**
- 日時：2008/12/02（Tuesday）　15:00～17:00
- 場所：京都大学桂キャンパス C クラスター　C2 棟 102 講義室
- **主催：京都大学ＧＣＯＥプログラム都市ガバナンス領域研究会**
- **主な参加者**

門内輝行、神吉紀世子、ティティ・ハンダヤニ（Jogja Heritage Society、京都府国際課招へい研修生）、佐藤裕一（金子佳生研究室）、小林貴子（京都府国際課）、山口浩司（京都府国際課）、Dwi Puji Astuti（ JICA 研修生）、Nur Rahmanto（ JICA 研修生）、 Syafwina（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科(ASAFAS)）、Arie Wibowo（松岡俊文研究室）、Mia Ledyastuti（松岡俊文研究室）、Fitrasha Nabilashuada（清野純史研究室）、ティティン・ファティマ（高田・神吉研究室）、本塚智貴（高田・神吉研究室）、寺川隆史（高田・神吉研究室）、山崎晋一（高田・神吉研究室）

- 研究会の目的概要

Jogja Heritage Society (JHS) は、古都ジョグジャカルタ市とその周辺地域の文化遺産や歴史的町並みの保全まちづくりに尽力してきた民間非営利組織で、ガジャマダ大学（Universitas GadjahMada=UGM）等の諸大学の教員や卒業生や在校生が多く参画し活動している。2006 年 5 月のジャワ地震以前より、ジョグジャカルタ市中心部の王宮とその周辺地区や、市の東南に位置する歴史的市街地 KotaGede 地区などのまちづくりに貢献してきた。ジャワ地震直後には、UGM や他の諸団体とともに、いち早く被災地域の支援活動に従事し、現在まで様々な復興活動をマネジメントしている。とりわけ、バティック（ジャワ更紗）や銀細工、木工細工などの、古都の伝統産業を支える職人層でもある被災地住民の生活再建支援のため、コミュニティ・ベースでの産業復興および振興を促し支援する活動を継続している。

京都府ージョグジャカルタ特別州の友好自治体関係のもとに行われている復興支援研修のプログラムに参加するために来日された JHS のティティ先生を京都大学にお招きし、ジャワ地震からのジョグジャカルタの歴史都市遺産の復興状況についての基調報告を伺うとともに、今後の研究交流のためのディスカッションを行う。

・プログラム

・基調報告

「ジャワ地震からの復興の現状と歴史都市遺産～インドネシア・ジョグジャカルタ～」

ティティ・ハンダヤニ（Jogja Heritage Society、京都府国際課招へい研修生）

・ディスカッション

コメンテーター　門内輝行（京都大学工学研究科建築学専攻教授・GCOE 領域ﾘｰﾀﾞｰ）

コーディネーター　神吉紀世子（同都市環境工学専攻准教授・GCOE 研究分担者）

・研究会の様子，得られた成果

研究会には、京都大学の教員・学生、京都府、京都府のインドネシア研修生等、約２０名が参加した。

基調報告では、**JHS（Jogja Heritage Society）のティティ先生よりコタゲデとイモギ**リという２つの地域におけるジャワ地震での被災からの復興の現状についての報告がおこなわれた。報告内容は、震災復興のみでなく、伝統的まちなみ景観の再生保全、現地で生活する人々の暮らしや伝統的な産業を守るための JHS の取り組みが報告された。

世界的危機遺産リストにも登録されているコタゲデの事例では、JHS がユネスコジャカルタとともに１年間かけて作成した、建物のオーナーがいかにして古い建物を修復すればよいかのマニュアル本の紹介がなされた。

震災の被害が最も大きかった地域の１つであるイモギリの事例では、伝統的産業であるバティックの復興支援に関する報告がなされた。その一方で、産業発展による一般住宅の増改築による非伝統的建築物の問題が指摘された。

基調報告を受けた、会場を交えてのディスカッションでは、作成されたマニュアル本に関心が集まり、伝統的建築物の保全やレンガ壁の耐震補強の方法など詳細な内容に関する質疑が行われた。京都のコミュニティシステムを例にあげ、インドネシアにおける地域の意思決定がどのような単位で行われているかという質問に対しては、インドネシアにも RT（隣組に相当）と RW(町内会に相当)というシステムが紹介され、講演者からは逆に京**都のコミュニティシステムに関する質問がなされる場面もあった。**

最後に、今後の研究協力の中で、日本から参画して活動を行うならどのようなどのようなことを考えていく必要があるかに関して、インドネシアは民族も異なり、様々な地域があるということを踏まえ、マスタープランをつくるのではなく、one by one の対応を行い、それらがうまく一体化するようにローカルに考えていくことが重要であるということが指摘され、今後の協力体制の確認が行われた。

- 研究会での主な議論点

コミュニティの中に入って活動するには

何のためのマニュアルで、どのように利用されているのか

地域の意思決定がどのような単位でなされているのか
地域らしさを残すのか観光地化するのか
観光のための巨大な道や店舗建設の可能性
（現地外の地域に住む）オーナーの観光開発による景観悪化
再建や保全に関しての配慮について
震災被害の大きかった構造（柱、梁、ブロック造）の耐震性に関して
インドネシア特有の街のパターンについて
日本から参画して活動に関して
今後の協力体制に関して

写真１：開催者挨拶風景

写真２：ティティ先生による基調報告

写真３：会場とのディスカッション風景